



2009 年 (平成 21 年)
11 月号 (No. 774)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価 1 部 150 円

URL ● <http://www.jac.or.jp>

e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目 次

新みなかみ紀行「八ッ場ダム」……	1
ブレネリの庭の雪が消えた ——スイス・アルプスの温暖化現象……	4
“Japan”と“Japanese”……	6
登山界はいま——②日本の山岳団体……	7
東西南北……	8
「アルパータ登頂記念75周年事業」後日談 三百名山完登と富士山300登達成 活動報告……	10
集会委員会／自然保護委員会／ 三水会／緑爽会 支部だより……	13
北海道支部／東海支部 図書紹介……	15
図書受入報告……	15
会務報告……	16
ルーム日誌……	17
会員異動……	17
新入会員……	17
INFORMATION……	18
山の博物館訪問……	19
植村直己冒険館	

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木 …… 10～20時
水・金 …… 13～20時
第2、第4土曜日 …… 閉室
第1、第3、第5土曜日 …… 10～18時
年末年始休室・12月29日～1月5日

新みなかみ紀行「八ッ場ダム」

近藤 緑

民主党に政権が移って以来、マニフェストにそった政策がとられ話題を呼んでいるが、そのひとつに「八ッ場ダム工事中止」がある。このほど緑爽会が、「『みなかみ紀行』の昔を回顧しつつ八ッ場ダムの現状をみる」という企画を立てた。そこでその中心となった近藤緑さんに、川原湯温泉周辺の現状を報告してもらった。

11月5日、私たちの乗ったマイクロバスは紅葉の吾妻溪谷を走っていた。現地で迎えてくれる山本良三会員とは、川原湯温泉駅で会うことにしていた。

ところが、近づくにつれてハイカーの姿が目につくようになり、駅周辺は駐車した観光バスや乗用車で埋め尽くされ、いつときの停車さえままならない状態だった。

前原国土交通大臣の「八ッ場ダム工事中止」発言以来、人出が多いとは聞いていたが、紅葉も盛りを過ぎた、しかも平日である。これほどの混雑は予想もしていなかった。山本さんとは、携帯電話で連絡しあって、ようやく落ち合うことができた。誰も責められない。私たちもまた、バスで繰り出した野次馬集団なのだから。

「緑爽会で八ッ場ダムに行くそうですね」と、会報編集長から電話があったのは、10日ほど前のことだった。「ええ、若山牧水ゆかりの暮坂峠と組み合わせで」「八ッ場ダムについて書いてください」と、性急な依頼であった。どうやら世間と狙いは同じらしい。

八ッ場に行くといっても日帰りのバス旅行では、現地に滞在する時間は限られている。しかもダム予定地だけでなく、牧水「みなかみ紀行」の道をたどって、暮坂峠の詩碑も訪ねなければならぬ。

幸いなことに私も自然保護委員会報の編集担当。この旅行を計画した段階で、群馬県出身の富澤克禮委員長に八ッ場ダムの解説を頼んであった。また、ダム予定地の長野原町に隣接する六合村には、

旧知の山本さんが定年後住みついて山仕事に励んでいる。彼が「八ッ場ダム本体工事中止の意味」と題して静岡大学山岳部紫岳会(紫岳ニュース63号)に寄せた文章も読ませてもらった。そのほか各紙が競って書きたてた関連記事を前にして、私は今、レポート提出の期限が迫った学生の気分である。

発端は戦後まもない台風から

八ッ場ダムの経緯をたどると、1947(昭和22)年秋のカスリーン台風による大洪水にまで遡る。関東地方を襲った豪雨のため、利根川の堤防が埼玉県栗橋付近で決壊、被害は県東南部から東京都葛飾区、江戸川区の広域に及んだ。死者1057名、全壊家屋5301戸、流失家屋3997戸と記録

にある。

戦後まもないこの台風のときは、私はまだ疎開先の信州にいた。その後上京して住んだのが、下町のいわゆるゼロメートル地帯だったから、私にも洪水の体験がある。水洗トイレも下水道もなかった頃の被害といえば、家に流れ込んでくるのは汚水そのもの。家畜の死骸まで浮かんでいた。いまでは河川の堤防は整備され、大工場が移転した跡地には高層マンションが建ち並んでいる。住民に往時を知る人も少なくなった。

推進あるのみできたダム計画

今度の前原国交相の発言について、初めに「中止ありき」はけしからんという声がある。しかし、八ッ場ダム計画を考えたとき、これまでの60年近く、ただ「建設あるのみ」で推進されてきたのではなかったか。

「昔、ダムに沈むと聞いて川原湯温泉に来たとき、ダム反対の貼り紙でいっぱいだった」とは、バス旅行参加者の何人もの口から出た証言である。カスリーン台風後の治水事業として八ッ場ダムの調査が始まったのは1952(昭和27)

年のこと。水没する川原湯温泉はじめ地域住民はいっせいに反発し、激しい反対運動が起こった。

その後、利根川水系には七つ、渡良瀬遊水地と合わせて八つのダムが完成し、最後に残ったのが八ッ場ダム計画。もともと吾妻川の水量は少ないのだから、この時点で治水目的のダムをつくる根拠は薄れていたはずである。しかし今度は、多目的ダムに変更して、首都圏への給水を名目に加えたのだった。

ところが吾妻川は、上流にある白根山や草津温泉から流れ出る硫酸分を含む強酸性の水質、昔から魚も棲めない川と言われていた。飲用には適さないことを主張して住民たちは一層強く反対した。

いったんは沈静したかに見えたダム計画が、再び浮上したのは1965(昭和40)年、上流に水質を中和させるための施設と、中和生成物を溜める品木ダムが完成してからである。ここで連日、液状にした石灰を投入することで酸性濃度を下げているのだという。

しかし、品木ダムを経由するのは、八ッ場ダムに流れ込む水の約4割に過ぎず、ほかの河川は強酸



完成した県道横壁線の橋梁

性のままで貯水される。また、品木ダムに沈澱する中和生成物のなかには砒素が含まれているというコワイ話もある。浚渫したヘドロをどう処分するのだろうか。考えれば考えるほど悪条件の重なるなかで、なぜこれまで見直しがされなかったのかという疑問に行きつく。

とにかく、当初、地元は猛反対だったのだ。それが1985(昭和60)年、長野原町が県の示した生活再建案を受け入れるまでには、どれほどの切り崩しがあったことか、想像するにたかくない。

だとすれば、地域の人々を翻弄

したのは新政権ではなかったはず。何がなんでもダム計画を推進したのは旧体制の人々だったのではないか。地元は「工事中止に反対」だというが、それは、今となってはダムによる税収に頼るよりほかない町政サイドの言い分ではないのか。住民のなかには、中止と聞いてひそかに安堵している「声なき声」があることも新聞は伝えている。

必要なだけ増額できる工事費

ダム建設を中止することは、これまでで費やした国費がムダになるという意見がある。八ッ場では、すでに住民のための用地買収や川のパイパス工事を終え、現在は代替地の造成やJR吾妻線、国道・県道の付け替え工事が進められている。

バスの車窓からも八ッ場ダムのシンボルのような橋梁工事や代替地を見ることができた。しかし、これらはダム建設に伴う付帯工事であって、ダム本体の工事はこれからだ。それが前原国交相の中止宣言で、入札が延期になった。

私たちが訪れるというので、山本さんが現地事務所へ話を聞きに



工事途中でストップしたままの橋脚

いつてくれたが、「民間人への説明はしない」(できない?)と断られたそう。ハツ場のPRセンターにも資料は置いてなかったという。こんなところにも現場の戸惑いを察することができ。

ちなみにハツ場ダムについては、1986(昭和61)年に立てられた基本計画が、2001年、04年、08年と、3度にわたって変更され、工期が延長されてきた。最終計画では、2015年完成予定になっている。一方で工事費も、2004年に、これまでの約2110億円から約4600億円に倍増した。そのうちの7割がすでに使われ、残る約1390億円でダムを完成

させることになるが、とても不可能だという指摘がある。公共事業というものは、いくら予算をオーバーしても責任を問われることがないらしい。

支出した3210億円のうち、治水については1750億円の3割を東京・茨城・栃木・群馬・埼玉・千葉の6都県が、利水については1460億円を栃木を除いた5都県が負担している。ダム中止宣言の直後に6都県知事が、連れだって現地視察に赴いた所以である。しかし、すでに水余りと言われる東京に、これ以上の水が必要なのだろうか。それも水質に問題のある水なのである。

ここで中止したとしても

ハツ場ダム問題は、進むも退くも茨の道。ダム本体工事を中止した場合の返還金や補償はどうなるのか。難題が山積していることは言うまでもない。

気の毒なのは、半世紀以上もダム計画の渦中におかれた人々である。地域の連帯は引き裂かれ、高齢化の上に人口の流出が続く、今後どうして再建していくか、途方にくれる思いでいるに違いない。

政府は新しく法案を作って地元への補償を考えているというが、その手続きは難航が予想され、時間もかかると言われている。

それにつけても思われるのは、国民がいかに無関心できたかということである。前原国交相の一言があつて、マスコミはにわかに騒ぎ出し、人々は現地を見ようと押しかけた。「今や世界のハツ場になった」という冗談には、地元の人々の自嘲と皮肉が感じられた。政権交代がなければ、公共事業の実態を知ることすら知られることもなかったに違いない。ここで一度立ち止まって考えることは、いい教訓になるのではなからうか。

「みなかみ」を守ることこそ

ところで、この57年間、吾妻川は一度も氾濫を起こしていない。「水域の山々に木々が繁茂し、緑のダムができあがった」と山本さんは書いている。彼はいま、退職金を投じて買った3万坪の山林を管理している。日本山岳会で理事・委員長を歴任、ヒマラヤへも遠征した人が、今では六合村の集落の上限に自力で山荘を建て、年間を通して樵の生活を続けている。



完成した橋と増水時を想定した護岸工事

訪れた山荘には、東京から手伝いに来た人たちが働いていた。昔の職場のスキー仲間だそう。ほかに母校静大山岳部のOBたちも強力な応援団だと聞いている。過疎の村で、森づくりの新しい姿を見る思いがした。いつときのブルムにのるのではなく、水源の山をみんなの故郷として守っていくことが、なにより治水につながるのではないかと思った。

帰りに立ち寄った牧水「枯野の旅」の碑のある暮坂峠も、枯野の面影はなく、大きくなった木々が旅姿の自然歌人の像を囲んでいた。

(写真〓山本良三、川口章子)

ネイチャー

ブレネリの庭の雪が消えた —— スイス・アルプスの温暖化現象

宮下啓三

長く登山を続けてきた人たちの話を聞いてみると、少年少女時代に見たり聞いたりしたことが山とのつきあいの原点になっているように思えます。

「おおブレネリ あなたのおうちはどこ わたしのおうちはスイツツランドよ きれいな湖水のほとりなのよ」という歌を知って、いつの日にかスイスでアルプスの山野を歩き回ることを最終目標として日本アルプスに通うようになった、と語った人がいます。

ヒマラヤやアンデスは高すぎて自分の力量が及ばないと率直に認めたうえで、日本アルプスを卒業してさらに高い所を目指すのなら、交通便利なヨーロッパのアルプスが最良の目標となります。そういうわけで、スイスで4000^{メートル}級の高峰たちを仰ぎ見ながら山歩きを楽しむ幸福な日本人たちがいます。

そんな日本人たちが直行してス

イスの土を踏むとすれば、チューリヒ空港が最初の到着地となります。その人たちのほとんどが、ユングフラウやマッターホルンなどの4000^{メートル}級の山々の群がるアルプス山麓に急ごうとします。

スイス民謡の主人公

はやる心を抑えて、チューリヒ市内をゆつくり散策する時間をもつ人が、晴れて遠望のきく日に南の方に立ち並ぶアルプスの山々を見ると、夏な面白い万年雪の世界が帯をなしています。その眺めのなかにスイス娘ブレネリが隠れています。

チューリヒの東南の方角、およそ70^{キロ}。最も近い万年雪の山頂のひとつ。そこそそスイス民謡の主人公の居場所です。アルプスの娘ハイジにゆかりの土地に向かう鉄道幹線を途中駅で降りて支線に乗り換えればグラールスという、小さいながらも州庁所在地としての

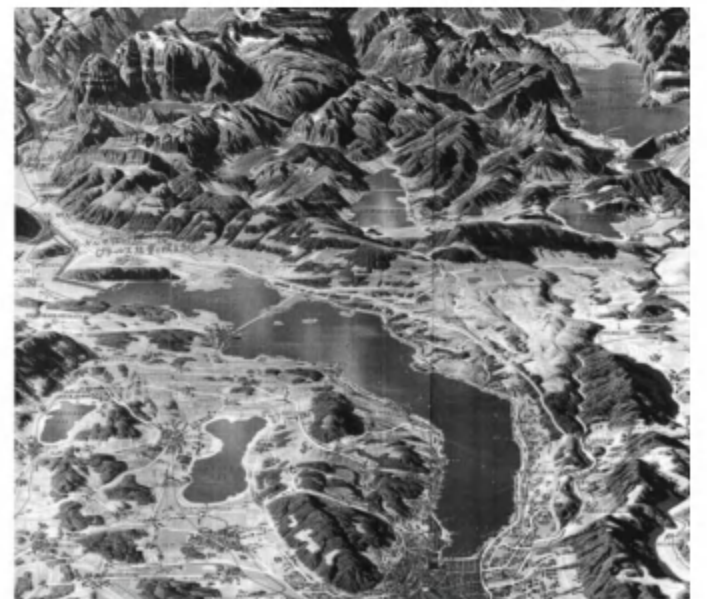
貫禄をもつ町に達します。深い谷間にあるグラールスの東側の山脈に「ブレネリスゲルトリ」という峰があります。

グラールスから山脈の尾根の部分を迂回して北側に行くと、クレインタール湖畔に着きます。海拔848^{メートル}のその湖畔が「きれいな湖水のほとり」です。でも、憧れのスイス娘の姿はそこにありません。標高差2000^{メートル}余りで湖の南に険しくそそり立つ峰の上こそがブレネリの住みかです。

ブレネリの本名はフェレーナ、その愛称でもある略称がブレネリです。日本語の歌詞では、英語式に濁音化されています。伝説によれば、ブレネリは親やおとなたちの言うことを聞こうともしない反抗的な娘で、無茶なことをするなという忠告をふりきって、頂上近くの雪原に草花の種を蒔きにいき、二度と戻ってきませんでした。自然の道理にそむく行動が神の罰を受けたのです。

頂上から雪が消えた

標高2904^{メートル}のブレネリスゲルトリという峰の名を翻訳すれば「ブレネリの小さな庭」です。峰



右下の町がチューリヒ、左上の山が「フレネリの小庭」アルプスのパノラマ地図から

の頂上部分の北側が、まるで底の浅い灰皿を斜めに傾けて乗せたようなユニークな形をしています。そこに万年雪が円盤状の雪原を形成していてブレネリの伝説を生みました。1848年にピッケルとアイゼンを装備したスイスの男性たちによって初登頂されました。

私はかつてグラールスからさらに奥、ブレネリ伝説を宿す山脈の東側の山村を真冬2月に訪れました。そのとき、真っ暗になった夕刻、少年たちが山の斜面に積んだ薪を燃やし、赤い燃え木を谷に投げ落とすという、古くからの冬追い行事を見たことがありました。魔力をふるう冬將軍を追い払う年中行事は、住民の生活の厳しさを知らずに、夏な面白い山の雪に美



アルプスの最高峰モン・ブランのボソン氷河も後退が激しい

しさだけを感じる無邪気な観光客の想像を絶する光景でした。フレネリが山頂直下の雪田を花園に変えようとしたと伝える話には、土地の住人の深い願望がひそんでいたのです。

2009年、スイスからショッキングな知らせが届きました。フレネリスゲルトリ峰の頂上部の雪が完全に消え失せて、ふつうの登山靴で登れてしまうということです。山頂は薄茶色の岩石だけになってしまいました。かつて神の定めた自然の理に反逆したフレネリは天罰を受けて雪に埋められました。その雪を消したのが神の意志でないとしたら、温暖化はどのような

罰を受けるのでしょうか。

国境線が変わる

日本山岳会が創立百周年を機に分水嶺をたどったのは意義深い事業でした。同じことを今アルプスで企てるとどうなるのでしょうか。

スイス西南部で、イタリアとの国境をなす稜線の雪が溶けつづあります。単に高度が数メートル低くなっただけではありません。南のイタリア側から吹き上げる風に乘った水分がスイス側に雪となつて積まりました。その一番高い所が稜線となり、国境線とされていきました。

今、その雪が溶けはじめて稜線がイタリア側にずれこみつつあります。当然、国境線が地図上で修正されなくてはなりません。スイスの国土が広がり、イタリアの面積が減っています。今のところイタリア政府が事態を黙認していますが、この先いつまで既成事実の進行を認めつづけられるのでしょうか。

青い湖水が濁った茶色に

もうひとつ話題を加えます。スイスというと青い湖水ばかりが思

い浮かべられます。しかし、スイス中央部、アイガーの東側で氷河が溶けて茶色に濁った水がたまっています。その谷の狭まった地点は「死の門」という恐ろしい名をつけられています。そこが決壊しようものなら、日本人にも人気の高いグリンデルワルトに悪い影響を及ぼしかねません。

現代の観光旅行者たちは、登山鉄道でやすやすとユングフラウヨッホに達します。富士山の八合目に相当する高さにある展望台から、巨大なアレッチュ氷河の光景に目を見張ります。その登山鉄道のできるよりも前、スイス南部の東と西を分けるフルカ峠の近くがアルプス氷河見物の最適地でした。フルカ峠は海拔2500メートルほどの高所で、そこから西に尾根を巻いて達した所から見上げるローヌ氷河は、高山風景を見慣れない人を恐怖させるほどの威圧感をもっていました。

そのローヌ氷河を調査したチューリヒ大学の氷河研究所がコンピュータグラフィックスの方法で予測図を作りました。現在、すでにかなり後退してしまっているこの氷河が、22世紀初めにほとんど

すべて消滅している画像が現われました。「アルプス」の語源がラテン語の「白」にあるとする説が正しいのなら、夏なお白い雪をもつことで畏怖されてきた山脈が、その根拠を失います。白さを失って高さだけが取り柄となった山々を未来の人類が美しいと感じつづけるのでしょうか。

自然を変える能力をもつほど賢くなつた人間がいる一方で、変わらない自然を慈しむ人間がいます。私たちはどちらに組みしたらよいのでしょうか。

ここに紹介した三つの最近の現象は、それ自体としては、遠い日本で山登りを楽しむ人たちに直接の関係をもたない、軽い茶飲み話ほどのことに過ぎないかも知れません。しかし、「おおブレネリ」を楽しげに合唱する人たちに遭遇しようものなら、私は「その歌のもとになった山頂の雪が消えてなくなった」と告げたい気持ちを抑えることにつとめながら、永遠の住みかを失ったフレネリに思いをはせることになるでしょう。感傷にひたつていてはなりません。似た現象が日本の山のどこかで生じているかもしれないからです。

カルチャー

“Japan”と“Japanese”

大森久雄

9月、ヨセミテに行ってきました。成田―サンフランシスコの往復に全日空便を利用しましたが、機内の映画番組に『劔岳 点の記』がありました。ほかの路線にもあったようですが、面白いことに英語の字幕がついていました。英語に弱いから、字幕を追いかけてしまわずに画面(字幕)が変わってしまったのには困りましたが、興味をひかれたのは固有名詞表記です。ご存知のように、この映画では「日本山岳会」という名前が出てきます。字幕ではそれが“The Japan Alpine Club”となっていました。この会報『山』での表示は“The Japanese Alpine Club”です。

日本山岳会の誕生は明治38(1905)年10月ですが、当時の名称は単に「山岳会」でした。「日本山岳会」になったのは明治42(1909)年6月です。

*

ところで、映画で柴崎芳太郎の一行が劔岳を相手に苦闘し、そこ

に登るのは明治40年です。もうおわかりのように、その時点では「日本山岳会」という名前の組織は存在していないのですね。存在していない組織を相手に競争するわけです。この映画はフィクションのエピソードを積み重ねてきていますから、これもまたそのひとつ、と思えばすむのですが、字幕はなにを根拠に“Japan”としたのか。また、では日本山岳会の当初の英語表記はどうなっていたのか。

“The Japanese Alpine Club”という名称が公式になるのは、明治42年3月発行の『山岳』第四年第一号のようです。裏表紙に英文目次が登場して、そこに出ています。それ以前の『山岳』第三年第一号(明治41年3月)の雑録欄では小島鳥水が、ロンドンの「山岳雑誌」(アルパイン・ジャーナルのことでしょう)にのっている各国山岳会調査記事を紹介していて、日本山岳会のところは英文のまま転載。そこに“Japanese Alpine Club”

という表記があります。そのほかにもあるのですが、煩わしいから省略します。つまり発足の当初から“Japan”ではなくて“Japanese”でした。

わたしが本会の理事をしていた1970年代の後半、理事会である方が、“Japanese”はおかしい、“Japan”にするべきだと主張されたことがあります。“Japanese Alps”ではない、“Japan Alps”だとも。

わたしにはその当否はわかりかねましたが、後日そのことを日本登山史の生き字引だった故・山崎安治さんに話したところ即座に、それは“Japanese”に決まっている、ウェストンがそう書いている、と教えてくれました。

今回それを思い出して探してみたら、『山岳』第十三年第二号(大正8年4月)でウェストンが“The Japanese Alps”という名称の由来を説明していました。これもご承知のようにその名称を使ったのはガウランドですが、ウェストンはそこで、“The Japan Alps”と書く日本人がいるが、それは耳障りがよくないし、正しい英語の使い方でもないと言っています。ウェス

トンの本のタイトルが『The Japanese Alps』になっているのは周知のことですが、ほかのところでも“The Japanese Alpine Club”と書いています。ところが、そのひとつ前の『山岳』第十三年第一号の英文欄外国人新会員紹介やそのほかのところには“The Japan Alpine Club”となっていますから、混乱していたのですね。

ここで設問。日本山岳会の日本はニホンか、ニッポンか。

『山岳』第四年第二号、つまり「山岳会」から「日本山岳会」に変わった最初の号の英文目次ではこうなっています。NIPPON SAN GAKU KWAI (THE JAPANESE ALPINE CLUB)。『山岳』はSAN GAKU (The Japanese Alpine Journal) です。

*

話が変わりますが、“Japan”か“Japanese”かという問題よりも、わたしは明治42年のダブル表記方式がいいと思います。朝日新聞社は“The Asahi Newspaper Company”ではなくて“The Asahi Shimbun Company”です。NHKも含めて参考になるのではないでしょうか。

レポート

登山界はいま――

②日本の山岳団体

神崎忠男

未知を求め、より高くより困難を目指す登山から、自然体験、健康指向、レジャーへと登山が大衆化していくなかで、山岳団体、登山組織も、その時代にあった集団性を保っていかなくてはならない。会員の減少、高齢化、大衆化、競技化と過渡期ともいえる昨今の登山界、どこの山岳団体も何らかの問題や課題、悩みを抱えての運営活動である。

ここでまず、登山界の主な組織を解説的に述べてみたい。

1905年に日本山岳会が設立され、登山界イコール日本山岳会という時代があった。それが戦後、全日本岳人連盟（全岳連）という社会人を中心とした組織が編成され、1960年、大学山岳部出身者を中心とする日本山岳会と全日本岳人連盟とが半々の役員を出して日本山岳協会（日山協）が設立された。

日本勤労者山岳連盟（労山）も日本ヒマラヤ協会も立ち上がって

いない当時の組織環境のなかで、日本山岳会は、登山界の秩序を守ろうと日本山岳協会傘下の東京都山岳連盟（都岳連）に加盟し、登山界での位置づけ、枠組みを整えた。しかし、組織上のかたちは整ったものの組織につながることのメリットは生かされず、都岳連の加盟団体であるという意識すら薄いまま、今日までできてしまった。

ご存知のように日本山岳協会は、47都道府県の山岳連盟が加盟する団体である。国体を含め登山に関する各種の大会を開催し、指導者の養成、遭難事故の防止、自然保護、海外登山の指導や国際交流などを行なっている。山岳界を代表する形で日本体育協会、日本オリエンティック委員会、国際山岳連盟、アジア山岳連盟に加盟している。法人格は日本山岳会と同じ社団法人だが、当方が個人会員のクラブであるのに対して、山岳行政の一端を担う行政的組織である。

日本勤労者山岳連盟のスタート

は1960年。主として地域・職場・学校で作られている山岳クラブの団体加盟による全国組織（任意団体）で、650団体、2万5000人という会員数は日山協に次ぐ規模である（前回レポート①にある3万5000人を訂正します）。登山の大衆化に應えるため「スポーツ文化としての多様な登山」を掲げ、商業ベースと異なる山岳保険制度を導入するなどして活動を展開している。

日本ヒマラヤ協会はヒマラヤ愛好者による任意団体である。四つ目の山岳団体として1967年に発足し、先に発行された『山岳』第百四年の山森欣一理事長の記事にその40余年の歩みが詳しい。これまでのかたちで会を維持するのは難しいと、今年4月、山岳四団体懇談会の枠組みから離脱した。この四団体懇談会は10年前、「登山界の問題解決のため共同歩調を」と呼びかけて作られたものである。

時代的な役割を果たしてひとつは枠外に去ったが、日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト（HAT-J）は山岳自然環境団体、そして新しく設立された日本山岳文化学会は山岳文化団体、そ

のほかにもフリークライミング協会、ハイキングクラブ、トレッキング協会など山、登山に関係する団体が多く存在する時代ではある。そんななかで日本山岳会は、登山界のなかでも最も歴史の古い老舗的存在である。しかし、これを平均年齢が65歳を超えた高齢者集団として捉えれば、尾上会長も言うとおりの先行きは厳しい。

クラブなのだから会員サービスに徹していればいいという声も聞かれるが、果たしてそれでいいのだろうか。登山界から信頼され、社会の期待にこたえてこそ組織のステータスは高まる。登山愛好家、登山界への奉仕、社会貢献の活動のなかに、組織としての日本山岳会の真価が問われていると思う。

20年前、30年前には考えられなほど多様化した登山界――。どの団体も同じような試練に直面している。組織に関わる者の意識改革が、まずは時代の要請にこたえる近道だと信じている。

さて日本山岳会。伝統や過去の実績にとらわれて、変革を恐れてはなるまい。会員の多くもそれを望んでいると思う。変革のチャンスと考えたい。

N — 東 西 — — 南 北 — S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)

「アルバータ登頂記念75周年事業」後日談

芳野菊子

6月16日、カナダのケンモアで元カナダ山岳会会長で現在UIA A (国際山岳連盟) の会長を務めるモーティマー氏が、副会長のサソフォード氏と標記の事業の関係者4名で夕食会を開いて下さり、思い出を語りつつ旧交を温めることができた。

この席で「折れたピッケル」にまつわる友好の物語を掲載した中学生用道德の副読本(準教科書)を贈呈し喜ばれた。

1997年の年次晩餐会には、当時のカナダ山岳会会長モーティマー氏が招かれ、壇上で、1925年、カナダの未踏峰アルバータに初登頂した日本隊(横有恒隊長)

が残したピッケルの上部(在カナダ)と下部(在日本)が接合される儀式が行なわれ、同時に日加合同での「アルバータ登頂記念75周年記念事業」が提案された。

2000年8月、事業はカナディアアンロックを舞台に展開された。アルバータ峰への日加合同登山をはじめ、5方面へのトレッキングツアーやジャスパールでの盛大な記念式典が実施された。

日本から参加した70名余の会員の一人として参加し、カナダ山岳会会員の献身的なサポートを得て、カナダの山のすばらしさを堪能し、忘れがたい貴重な体験をすることができた。

こうした恩恵に浴することができたのは、75年前に横隊長を中心とした日本登山隊が残した、初登頂という記録に加えて、国際的な友好関係が基礎になっていることを実感した。



ケンモアでマイク・モーティマー氏(右)らと

事業のきっかけとなった「折れたピッケル」にまつわる国際的な友好の物語は大変興味深く、ぜひ後世に伝えていかねばと思った。事業の直後、この話題は新聞などで報道され、広く知られるところとなったが、報道は一過性のものとなった。このままでは忘れられてしまう。

若い世代に伝えるには教科書に掲載するのが一番有効だ。「国際的な視野で行動する」ことを学ばせる中学生の道德教材にすることを思いついた。この道德項目の教材では途上国への支援を題材にしたものが多いが、75年も昔の日本人が登山を通して国際的な友好関係を築いていたという異色の題材を

提供することができる。

さいわい、元副会長の芳賀孝郎ご夫妻の協力を得て、当時関係していた教科書会社が作る道德の副読本に「友好のピッケル」と題して、掲載することができた。

今年度改訂された副読本に再度掲載されたのを機に、アルバータ関係の資料を収蔵するジャズパールのイエローヘッド・ミュージアムとカナダ山岳会のライブラリーに新版の副読本を持参し贈呈しようと、芳賀氏を介してカナダ山岳会に連絡しカナダ訪問が実現した。

ジャスパールでは合同登山隊のメンバーだったアマン氏にも会って、思い出を語り合うことができ、カナダ山岳会との友好の一端を担うことができた。

三百名山完登と 富士山300登達成

有元利通

今夏、本会選定の「日本三百名山」を完登しました。その後、富士山300登も達成しましたので合わせて報告します。

最初の三百名山は、高二のとき(1966年8月3日)登った故

郷の山、那岐山(当時1240、後1255^{メートル}に改訂)でした。当時、深田久弥さんの『日本百名山』(1964年)も三百名山(1977年選定)も知るよしもなし。20歳からよく山に通うようになり、今夏8月8日に登った太郎山(2367^{メートル})が最後になりました。43年間の歳月ですが、三百名山を意識しはじめたのは、百名山を36歳で登り終わった(1986年8月13日)頃でした。

次の目標30歳代でアコンカグア(6960^{メートル})登頂は達成できず、その次の富士山12カ月連続登頂をクリアし、さらに毎月の富士山連続登頂に挑み83カ月連続登頂までいき、途絶えた頃からです。

三百名山を完登すると、どこが大変だったか、どこが一番よかったとか聞かれます。よかったのは、直近の山という感じです。最近の山の方が印象に残っているからでしょう。

09年5月4日に登った神室山(1365^{メートル})。この日、山頂には私一人。山頂までは残雪がたっぷりです。主稜線に出ると雪が溶けたばかりの所にシヨウジョウバカマやカタクリの花がたくさん咲いてい

ました。前年5月の笈ヶ岳(1841^{メートル})は、途中のカタクリの群落、雪上テント泊、快晴の山頂。展望では3月の野伏ヶ岳(1674^{メートル})、快晴で360度の大展望でした。

大変な山は、登山道のない山です。笈ヶ岳や野伏ヶ岳、猿ヶ馬場山(1827^{メートル})、尾瀬の景鶴山(2004^{メートル})、男鹿岳(1771^{メートル})などです。残雪期のみ登頂可能な山です。そういう山で、最近夏道ができて助かったのが、佐武流山(2192^{メートル})と毛勝山(2414^{メートル})。ほかにルートが長いとかヒグマの危険が高いなどでは、日高・神威岳(1601^{メートル})、ペテガリ岳(1736^{メートル})。1泊分の食料、寝具などを背負って林道を最低13・5^{キロ}歩かないと登れません。距離に加えてヒグマが怖いのはカムイクウチカウシ山(1979^{メートル})、幌尻岳(2052^{メートル})でしょう。カムイクウチカウシ山はヒグマの巣がある八ノ沢カールもあるので、ツアー登山(06年6月)になりました。

完登するには相当の年月を要します。最低5〜10年はかかるでしょう。ある人いわく「三百名山が終わった人は1万人くらいいるんじゃないか」と。今では多くの完登者がいると思います。ある女性が「三百名山ってふたつあるんだよね」と言っていました。本会選定の三百名山はそのひとつですが、これには、女人禁制の山上ヶ岳を含み、それに従うと女性はいつまでたっても完登出来ないというところになります。それなら、深田クラブ選定の「二百名山」にあつて、三百名山にない荒沢岳に代えるものをいうのでしょうか。

そのほかで困難な山は、火山活動で禁止の山です。私も「登頂した」ことにしていますが、桜島

(北岳)がそのひとつです。以前は登山道がありましたが今はなく、活動中の南岳から半径2^{キロ}以内に北岳山頂部が入るゆえに登山禁止になっており、多くの人は湯ノ平の展望台で登ったことにしています。私は、標高770^{メートル}付近まで登って、登ったことにしました。樽前山と渡島駒ヶ岳は活動が活発のため登山禁止となり、2度目によつと登りました。浅間山や阿蘇・高岳は、静かなとき登りました。焼岳や頸城の焼山も火口から2^{キロ}以内は禁止でしたが、安全とみて登り、普賢岳は噴火前に登りました。

た。完登するには金と時間が必要です。終えた人も多いと思います。が、現役の勤め人では少ないのではないかと思います。私は、退職間近ですが、現職で完登出来ました。

富士山300登は、8月22日に達成しました。95年3月までに109回登頂していました。この頃は毎月の連続登頂をやっていた、3月で51カ月連続していました。97年4月に滑落したときも、半月後に登頂して連続を続けましたが、この年12月に登れず83カ月連続でストップしました。

あとは通算登頂回数の記録になりました。この頃は、年9回から20回くらいずつ登っていました。2000年までは厳冬期も登っていましたが、最近5月から11月に登っています。今年は、6月から8月22日までで、16回登り300回の登頂になりました。初登頂の73年8月から37年かかりました。富士山300登は10人ほど、三百名山完登者はたくさんいると思います。でも、両方合わせて600山、山を楽しんだ日本人は私が最初だと思います。もしかしたら世界で初めてかもしれません。

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

集会委員会

初秋の劔岳を登る

9月5日から7日まで、集会委員会の企画に参加した。当日は福島、群馬からの参加者も交え、21名が初秋の劔岳を目指した。

5日9時、室堂バスターミナルを出発。一ノ越から雄山を経て大汝山、富士ノ折立、真砂岳、別山の行程で歩く。初日からさわやかな好天に恵まれ、立山の山々から歓迎されている感じがした。予定の15時50分に劔沢小屋に到着。夕食時に自己紹介をして、明日の劔岳登頂成功を皆で誓う。

6日、小屋前を5時に出発する。6時10分、一服劔。7時10分、大岩。同25分、前劔に到着。ガレ場が続く山道を、時折り吹く心地よい風に癒されながら進んでいく。ひたすら頂上を目指すなかで、聞こえてくるのは足音と風の音だけ

である。この日は登山者が多く、カニのタテバイ前辺りから渋滞が続いた。パーティはペースを合わせ、安全を確認しながら何箇所もある難所をこなしていく。

登り始めてから5時間後、9時45分に劔岳山頂に到着。三角点を確認し、記念撮影。食事をとりながら四方に広がる景色を楽しむ。雲に遮られることなく、白馬岳、五竜岳、鹿島槍ヶ岳、遠くに槍ヶ岳を見ることができた。

10時30分、下山開始。下りの難所カニのヨコバイ、平蔵ノ頭を経て前劔から一服劔へ、そして13時に小屋へ無事に戻った。夕食前、談話室で登頂を祝って乾杯。楽しい山の話で大いに盛り上がった。7日、6時過ぎに劔沢小屋を出発。劔御前小舎を経て硫黄の匂い立ち込める地獄谷を通過し、みくりが池温泉に立ち寄った。温泉につかった後、山行の成功を皆で喜



快晴の劔岳頂上で

び合い懇親を深め、12時に解散した。参加者全員が素晴らしい時間を共有できたことに感謝したい。

(前川みどり)

自然保護委員会

磐梯の自然観察山行

9月26日・27日、裏磐梯沼尻高原ロッジ(田部井淳子氏経営)に宿泊し、磐梯朝日国立公園の山に登った。

26日は18名で一切経山(1948m)を登る。9時、福島駅に集合してバスで浄土平へ。標高1600mの浄土平はすでに紅葉が始まり、その美しさにバスの中から

歓声があがる。ツタウルシ、ドウダンツツジ、ナナカマドなどは真っ赤に、ダケカンバ、カエデ類は黄色に染まり、ハイマツの緑によく映えている。一切経山は昨年ガスが噴出したため、直登のルートは閉ざされていた。

12時5分、一切経山に到着、ここで昼食。天候に恵まれ、頂上直下の五色沼はコバルトブルーに光り輝き、別名の「魔女の瞳」そのものだ。下りの酸ヶ平、姥ヶ原にはエゾオヤマリンドウがまだ咲いており心とむ。クロマメノキの黒い実をつまみながら楽しむ。14時50分、浄土平に戻り、バスに乗り込む。16時10分、宿泊先の沼尻ロッジに着く。

ロッジには福島支部の方が遠く海の小名浜から車で3時間かけて、新鮮な秋刀魚とトロホッケを運んでくれた。自ら炭火で焼いてふるまってくれ、ベランダ一面に秋刀魚の美味しいにおいが広がる。焼きたての秋刀魚をほおばりビールでの乾杯は至福のひとつだ。遠くには夕日に染まる磐梯山が美しい。目の前はスキー場のゲレンデで、芝生が青々としている。田部井氏は不在であったが、2階のコ



霧の安達太良山山頂にて

1ナールに写真や展示物があり、日ごろの活躍が感じられた。

27日、安達太良山へ。バスでロ
ッジから奥岳へ移動。8時10分、
リフトで展望台まで上がり、山頂
を目指す。宮城支部より親子3名
が加わり19名で登る。10時、山頂
は霧で何も見えない。全員で記念
撮影。鉄山(1709m)に向か
う。途中、馬ノ背から沼ノ平の全
貌が霧の切れ間から顔を出す。噴
火の跡が凄まじい。11時、鉄山で
昼食。ガスあたりは何も見えな
い。胎内岩あたりから霧が晴れて
きた。紅葉が美しい。

湯の花採取場には沼尻温泉の源

泉があり、80度Cの熱湯がとうと
うと流れている。

白糸ノ滝を眺めながら下山し、
14時30分、沼尻登山口に着く。バ
スで沼尻ロッジに向かう。昨日同
様、かけ流しの温泉でまた汗を流
し、現地解散した。

今回は、福島支部、宮城支部の
方々に大変お世話になった。宮城
の小学生・マリモちゃん元気で
みんなのアイドルだった。日本山
岳会は全国に多くの仲間がいると
思うと頼もしい気がした。

(斎藤友護)

三水区

上高地「六百年」に登る

三水区内有志(武四会)による
8月度山行は、上高地山研利用で
六百年とヒョウタン池に登る計画
となった。

上高地は、特別名勝・特別天然
記念物(自然保護区域)に指定さ
れており、景観と自然環境の多様
性で日本の最有力の観光地になっ
ている。ウォルター・ウェストン
が、この地を世界に広めて百十余
年、岳人、旅人を魅了してやまな
い山岳景勝地でもある。

穂高連峰、焼岳、六百年山、長堀
山などの高山に囲まれた盆地は、
その中心に明神池、田代池、大正
池を連ねて梓川が流れている。河
童橋の上から眺めると眼前に岳沢
からの穂高連峰が広がるが、南東
に位置する六百年山は、上高地から
すぐ近くに見えているにもかかわ
らず、あまり省みられない岩山で、
一般登山道はない。霞沢岳を後ろ
に従えた玄人好みの渋くて味わい
深い山である。

8月28日、山研に15人が集合し
た。三水区・塩澤代表も鹿島槍ヶ
岳からの帰途に合流、焼岳登山組
も交え、貸切状態となった。楽し
い大宴会では山の話に花が咲いた
が、翌日の登頂を考慮し早目の就
寝となる。

29日4時起床、5時スタート。
河童橋脇のトイレ横から堰堤を抜
け、リーダーの成瀬夫妻が入念に
下見をしたルートを、息の合った
リードで進むが、早速ヤブこぎと
なる。しばらくはシダの茂る樹林
帯で、赤松の巨木もある急登が続
く。まもなく中畠沢の瓦礫の沢道
を登るようになる、最初は45度ぐ
らいの斜面であり、ところどころ
に小さなケルンが積まれていた。



雨のなか、苦勞して登頂した六百年山頂上で

雨がひどく降りだしたので雨仕度
をする。その後、上部は30度に近
い急傾斜のガレ場から抜けて草付
に取り付き、やがて樹林帯に入っ
たところで小休止、朝食をとる。
約2時間が経過していた。

そこからは踏跡をたどる尾根の
急登の連続で、木の根につかまり
ながら慎重に登る。大きな岩に出
合い右手に回り込み進むと、その
先の急傾斜の30度ぐらいの草付斜
面になり、声を掛け合いながら慎
重に登る。下りの時には注意を要
する傾斜でもある。その後、オー
バーハング気味の最後の岩場を抜
けると、ハイマツがびっしり付い

た尾根上になり、かき分けて登ると、三等三角点(2449・9^トメ)のある、あまり広くない山頂に着いた。ちょうど10時であった。

記念撮影し、周りを見渡すと、雲の切れた合間に穂高連峰と明神岳の鋭鋒が見え、眼下を見下ろすと、帝国ホテルの赤い屋根と梓川、大正池がパノラマのように印象的に見渡せ、感激がひとしおである。平均年齢67歳が楽しんだ山登りとしては、ハードで手強い山の印象であった。

下りはより慎重に下山し、14時半には、河童橋のざわめきのなかにいた。

(高木康雄)

緑爽会

鼎談——映画『劔岳 点の記』をめぐって

10月2日、104号室にて登山史を研究されている布川欣一氏をお迎えし、本映画の時代考証に携わった羽田栄治会員と宇治長次郎と同郷でこのほど『山案内人 宇治長次郎』を上梓された五十嶋一晃会員による鼎談を企画した。各氏はそれぞれ次のように語った。

布川氏は、山岳景観を見事にと

らえたカメラには感動したし、背景音楽ともよくマッチしていたが、ストーリーの展開には違和感を覚えた。山と溪谷社から歴史的事実とどこが違うか書いてくれとの注文があり、「史実と創作のはざまで」と題して『山と溪谷』6月号に寄稿した。柴崎芳太郎が明治40年、劔岳山頂に四等三角点を設置したという事実、これ以外はすべて疑問だらけの物語である。

羽田氏は、時代考証の観点から当時の服装等は明治43年にユングフラウに登った加賀正太郎氏のマント姿などを参考にした。監督の木村氏は、本職が映画カメラマンだけにデジタルよりフィルムに誇



映画について語る、左から羽田、布川、五十嶋の各氏

りをもっており、映像としての仕上がりは素晴らしいものだった。

五十嶋氏は、明治40年の測量登山は謎や疑問が多く、新田次郎氏の小説や映画は構想力で補わないと物語として成立しない。柴崎測量官が記した事柄や発言(『山岳』第三年三号、第六年一号など)に長次郎の名が見当たらず、1名だけ氏名不詳とある。小説も映画も、柴崎と長次郎は劔岳の山頂まで同行したことになる。しかし後々、昭和の世になっても柴崎は長次郎を「知らない」と言い張っているのは、何らかの伏せる理由があったからではないだろうか。それは何か――。

ところで、会報『山』1963年6月発行227号の河合良成会員(No.203)による「半世紀前の劔岳登山」では、「頂上に立っている棒杭は一昨年私が一人で担ぎ上げたんだ」と、案内した長次郎から聞いたとある。河合は吉田孫四郎らとともに陸地測量部登頂の2年後、劔岳に近代登山としての初登頂を果たした一人であり、後に厚生大臣、小松製作所会長などを歴任した人物。この時の長次郎の言葉は信用できるのではないだ

ろうか。

これより前、陸地測量部に先を越されたと残念がったのは日本山岳会発起人の一人であった越後の高頭仁兵衛であった。

蛇足ながら、この映画に登場する発起人の一人、小島烏水や、ウエストンに烏水を紹介し山岳会設立のきっかけをつくった岡野金次郎がこの地を訪れたという形跡は見当たらない。

ともあれ、久方ぶりの山岳映画として観るかぎり、山岳シーンも俳優たちの演技も見応えあるものであった。

(松本恒廣)

支部

だより

全国各地の支部から、
それぞれの活動状況を、
北から南へとレポート
します。

北海道支部

第10回自然児学校を終了して

小学生を中心とした3泊4日の
キャンプ生活が日高山脈のふもと
「新冠」で実現し、今年は10年目
となった。

7月下旬から8月上旬の盛夏で
あるが、雨の日もあり、子どもた
ちは原始の姿に接して貴重な経験
を積んでいる。夜になって大雨と
なり、近くの若園小学校に避難し、
翌日、校長の公宅周辺の流木処理
に協力したこともあった。その若
園小学校が児童数の減少により昨
年閉校となった。若園小学校への
通学路となっていた橋の上で、静
かな花火を楽しむことができたが、
地元と都会の小学生たちが交流す
る機会が少なくなっていく現実
は淋しい。

今年も松本健会員の所有地に9
張りのテントを設営し、充実した



父母や子どもたちが夢中になった自然児学校パン焼き

4日間であった。特に自然児学校
を経験した高校生がインストラク
ターとして協力参加され、若いパ
ワーが全体に与えるオーラの余韻
が嬉しい。

今回は特別企画として、特徴あ
る活動をした参加者に、ユーモラ
スでユニークな名称をつけた特別
賞を閉校式に発表し、滝本幸夫支
部長から一人ひとりに授与した。

薪割賞、営火賞、飯盒賞、登頂賞、
料理賞など、全員授賞のアイデア
と渋谷正巳会員がデザインされた
小物入れ袋(秀岳荘提供)が10周
年記念の参加賞となった。

自然児学校のメイン行事は2日
目の登山であり、笹山とペラリ山
を交互に実施してきた。1年おき
の登山ではあるが、成長期の感受
性豊かな子どもたちの体験談は興
味深い。最初つらかった笹山が、
2回目には余裕をもった自然観
察となり、友人に樹木や草花につ
いて話すなど精神的成長が頼もし
い。

3日目のツリークライミングと
ロープ操作、4日目のパン焼きや
ソーメン流しでの盛り上がりは、
サポーターの父母たちまでも夢中
になる。

最終日の温泉で、一般参加の2
人の婦人が泣いていた。
「孫が卒業しても私たちはサポー
ターとして参加させてください」
という言葉に、私の胸も熱くなっ
た。

(新妻 徹)

東海支部

第10次インドヒマラヤ登山隊 2009—アッチェ峰初登 頂

登頂記

IMF(インド登山財団)から
カルチャ・パルバット峰(627
0m)南面の許可を得て、199
1年のインド隊の記録を参考に計
画を立てた。最近の氷河の後退
(縮小)を危惧し、キャラバンに
先立ってカルチャ・ナラ(川)の
偵察を行なった。結果、流域の変

化でインド隊の右岸ルートは使えないことがわかり、左岸にBCを設営して頂上を目指すことになった。

7月1日、登山基地のマナリを出発し、南ダッカ氷河の4600メートル付近で高所順応後、7月8日、バタルからキャラバンをスタートした。カルチャ・ナラ右岸の河原をたどり岩壁をトラバースした後、スノーブリッジを渡って左岸に移り、2カ所の徒渉後、台地状の4400メートルにBCを設営した。BCまでは馬が使えた。

カルチャ・パルバット峰南面は雪線が高く、インド隊ルートの支尾根は水が得られないためあきら



アッチェ峰 (6066m) 北西面をC2より望む

め、南東からのルートを求めて、さらにカルチャ・ナラ左岸をつめることにした。

7月13日、4700メートル地点にC1を設営したものの、南東面からのルートも見出せず、C1の西の沢をつめ、氷河源頭の6000メートル無名峰に目標を変更した。これまでは晴天が続いたが、この日を境に天気が崩れ、みぞれ、雪の日が15日まで続いた。

7月17日、モレーン帯を乗り越え、氷河源頭の雪原5200メートルにC2を設営し、左に見える雪峰を目指すことにした。

7月18日5時30分、C2を高所ポーター4名と出発。ゆるやかな雪原を2時間、頂上への雪壁の取付はC2から高差300メートルほど登った地点である。残念ながら鈴木は雪原の途中で、足立は取付で断念した。

雪壁は所どころ60度ほどの壁が階段状に続いている。高度が上がるにつれ雪が深くなり、ラッセルに苦しむ。氷壁の手前の深雪に高所ポーターが立ち往生してしまい、私に替わってくれという。傾斜もきついで長時間ラッセルしたと思ったが、下山の際20メートル程度と分

かった。それほど苦しいラッセルだった。

氷壁を乗り越えた後も深雪に苦しんだが、14時30分、3名の高所ポーターとともに頂上(6066メートル)に立つことが出来た。C2からの高差約850メートル、9時間の登高だった。ガスが深くパノラマ写真が撮れなかったことは残念だった。

下山はヒドンクレバスに落ちるなどアクシデントがあったが、無事、取付に戻ることが出来た。振り返れば、ガスも切れトレールが頂上まで続いているのがくっきり見えた。

(松原立雄)

登山隊の概要

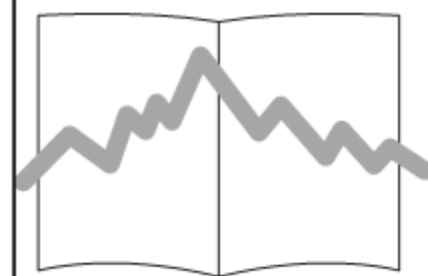
中高年支部員の増加に対応して、1988年に第1次隊を派遣して以来、10次13隊が目標のインドヒマラヤの6000メートル峰すべてに登頂している。うち6座は初登頂である。これらにより50歳以上の登頂者は延べ53名(女性15名)に達している。ただ、第10次隊の平均年齢は71歳と、時の流れを実感している。

IMFは規則で登山隊のGPS、詳細な地形図の持参を禁止してい

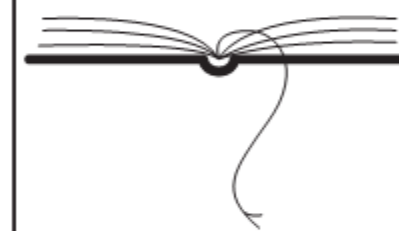
るため、山座同定に手間取ったが、帰国後、野村志保子氏の助言、入手したインド測量局の五万地形図で確定した。また、山容からラホール語の「娘」を意味する「アッチェ(Ache)」と命名した。

【登山隊】隊長 鈴木常夫(74歳)、隊員 松原立雄(75歳)、足立直行(66歳) (鈴木常夫)





図書紹介



岩村史子、篠浦千史・文

金斗鉉・絵

『サンガイ ジウナコ ラギ』



2008年12月
日本キリスト教団出版局刊
A4変型判 31ページ
定価 1575円

永年ネパールで医療奉仕に従事した岩村昇・史子夫妻の活動を覚えている本会員諸氏も多いことと思う。1962年にネパールに渡った夫妻は、医師や設備が極端に不足していた彼の地で、結核、ハンセン病、マラリア、コレラなどの治療と予防に奮闘した。

この絵本は、ネパールに渡った夫妻の熱い思いの原点ともいえるエピソードが綴られ、ネパールと日本の子どもにぜひ読んでもらいたい、ネパール語と日本語が対

訳併記されている。

ポカラ南西の町タンセンの病院で働きながら、歩いて来られない病人のために、夫妻が遠くの村々に出かけて診療に当たった。

ある村で重い病いの老女に出会い、何としても病院に移さねば皆に感染してしまうと焦るドクターの前に、一人の若者が自分が背負って運ぶと申し出た。歩き続けて3日目にタンセンに着き、岩村は感謝を込めて3日分のお金を差し出す。若者は頑として受け取らない。「どうしてそこまで親切にしてくれるの」と尋ねる岩村に「お婆さんを運んで徳を積むことが出来ました。運ばせてくれたドクターに感謝します」。続けて「サンガイ・ジウナコ・ラギ（みんなで生きるためだよ）」と言って、裸足で破れた服を着た若者は帰っていった。このお金があれば靴も服も買えたのにと、岩村夫妻は若者から

大きな幸せをもらった。

表紙から始まって全頁に色彩あふれる素晴らしい絵を担当した金斗鉉さんの絵筆は何とも優しく温かく、夫妻とネパールの人と風景を描き、この絵本をとっても魅力的な一冊にしている。金さんはダウラギリとニルギリ峰の間のナウリコットという小さな村へ、絵を描くことを知らない子どもたちのために、日本から紙や絵の具を携え、仲間たちと通っている。この春、2回目のボランティア行から戻り、いま3回目のナウリコット行きを計画している。

改めて記すまでもないが、この一帯は1950年、人類初の8000メートル峰登頂となったフランス隊がダウラギリとアンナプルナの正確な位置を求めて彷徨った谷であり、街道である。

今年7月には多摩美術大学に招かれて、イラストレーションを学ぶ多勢の学生たちに、子どもたちが描いたたくさんの絵を写しながら活動報告と今後の夢を語ってくれた。

医師から美術へ、ネパールに寄せる熱い志のリレーを見る想いだった。

(小泉弘)

図書受入報告 (2009年10月)

著者	書名	ページ・サイズ	出版元	刊行年	寄贈/購入別
沖允人・沖道子	足利からの山旅・最終版	545p/22cm	沖允人・道子(私家版)	2009	著者寄贈
信州大学山岳科学総合研究所(編)	登山道の安全を考える——白馬大雪渓ルート事例から	95p/21cm	信州大学山岳科学総合研究所	2009	発行者寄贈
鈴木みき	悩んだときは山に行け! ——女子のための登山入門	143p/21cm	平凡社	2009	三好まき子氏寄贈
越後宏治(編)	世界山岳地図集成——ヒマラヤ編	330p/37cm	学習研究社	1977	北嶋伸雄氏寄贈
小川正育	海辺の少年、山へ——ある山岳ガイドの半生	58p/19cm	小川正育(私家版)	2009	著者寄贈
鶴久嗣郎(編)	ティリチ・ミール回想——1969 Tirth Mir	54p/30cm	ティリチ会	2009	発行者寄贈
江本嘉伸(編)	モンゴル遊牧の山——ハルヒラーからオランマンダルへ	107p/26cm	東京外国語大学山岳会	2009	編者寄贈
仙之倉山荘資料編集委員会(編)	仙之倉山荘あれこれ——創建75周年記念資料集	207p/21cm	群馬大学工学部山岳部OB会	2009	発行者寄贈
本多勝一	六五歳ますます楽しい山山	153p/22cm	朝日新聞社	2009	著者寄贈

会務報告

平成21年度第6回(10月度)理事会

日時 平成21年10月15日 18時30分～20時30分

場所 日本山岳会会議室

【出席者】 尾上会長、神崎・宮崎・藤本各副会長、成川・岡部各常務理事、太田・相馬・山川・野澤・中山・永田・萩原各理事、深川・平井各監事、酒井・近藤各常任評議員

【委任】 堀井・谷川各理事

【欠席】 森常任評議員

【審議事項】

1・上高地山岳研究所ミニ水力発電所の情報(宮崎)

信州大学エネルギー環境教育研究会から同大学がエネルギー庁指定の地域拠点大学に選定され、その研究報告書の「エネルギー環境教育関連施設・活動の紹介」に当会ミニ水力発電所の情報を掲載し

たい旨の依頼があった。

(承認)

2・日本山岳会マークの使用願い(宮崎)

①山陰支部創立60周年記念として作成するTシャツに使用。

②千葉支部から房総半島分水嶺踏査担当の委員着用のジャンパーに使用。

以上2件の使用願いがあった。

(承認)

3・日本山岳会『英文ニュース』誌の利用願い(宮崎)

長岡正利会員から同氏執筆の『Japanese Alpine News』Vol. 8に掲載の一部を日本山岳文化学会の機関誌『山岳文化』10月号(11月末発行)に掲載したい旨の依頼があった。

(承認)

【報告事項】

1・平成21年度上半期予算管理月報(岡部)

平成21年度上半期収支予算の遂行概況は配布資料の通り概ね順調に推移している。

特記事項は次の通り。

①当初予算に計上のない「特定預金取崩収入」の約1800万円は当マンション102号室の買収資金である。

②支部事業費は今後の支部化推進の状況等を勘案しつつ運行している。

③JAC改革プロジェクトチーム関連の所要事業費については、当初予算に計上されていない部分もあり、基本的には予算全体の中で対応をすべきではあるが、各プロジェクトの緊急性かつ重要性に鑑み、特定預金取り崩しも念頭におくべきと考えている。

2・支部長会議報告(尾上)

9月12日、13日に名古屋市中で開催した。JACの抱える諸問題について執行部からの説明、それに対する活発な意見が出された。本部・支部の認識の共有が一層図られ、会議目的は十分達せられた。

3・新永年会員(宮崎)

今年度あらたに永年会員に該当する会員数は59名。ここ数年、毎年60名内外で推移し増加し続けて

いる。

4・真中5支部懇談会(尾上・神崎)

岐阜、京都、富山、石川、福井の5支部懇談会が、9月26日、27日、「立山荘」で開催され、本部からは尾上会長と神崎副会長が出席した。立山博物館副館長による「立山の自然」についての講演があった。

5・神戸大学・中国地質大学カンリガルポ山群合同学術登山隊壮行会(宮崎)

9月26日、神戸大学において壮行会が行なわれ、宮崎副会長が出席した。当神戸大学登山隊はJACによる助成登山である。

6・第4回広報連絡会議(成川)

9月30日開催され、JACからは「山の日制定プロジェクト」の取り組みを説明した。出席したメディアの大半はテレビ局と新聞社であった。

7・名誉会員を囲む会(尾上)

恒例の名誉会員を囲む会は、名誉会員7名が出席して、10月7日、日比谷松本楼で行なわれた(本部からは常務理事以上6名が出席)。

8・「法人改革対応検討プロジェクトチーム」報告(藤本)

9月25日に第1回会合を開き、今後のプロジェクトチームの進め方、検討事項、日程等の基本的事項について合意・決定した。

9・学生部パンポチェ登山隊(相馬)

パンポチェ峰(6620^ト)は頂上直下120^トで登頂は断念したが、サムドゥー峰(6335^ト)の初登頂に成功した。10月7日、全員無事にカトマンズに着き、10月15日もしくは16日に帰国の予定。

10・中部山岳国立公園特別保護地区内工作物の新築及び水位水量に増減を及ぼさせる行為について許可(太田)

上高地山岳研究所のいわゆるミニ水力発電所の取水、発電について、向こう5年間の運行許可が中部地方環境事務所長野自然環境事務所からあった。

11・公益法人制度改革に伴う定款変更案について(宮崎)

定款改定案検討委員会でまとめた定款案についての中間報告があった。

12・会報『山』10月号編集報告(成川)

ルーム日誌 10月

1日	学生部 アルパインフォトビデオクラブ みちのり山の会
2日	緑爽会
5日	総務委員会 高尾の森づくりの会
6日	図書委員会 定款検討委員会 アルパインスケッチクラブ 九五会
7日	常務理事会 集会委員会 山岳地理クラブ
9日	図書委員会
13日	二火会 アルパインスキークラブ アルパインスケッチクラブ
15日	理事会 科学委員会 秩父宮記念山岳賞審査委員会 システムプロジェクト 01
16日	会
17日	資料映像委員会
19日	総務委員会 資料映像委員会 指導委員会
20日	山岳研究所運営委員会 00 会 アルパインスキークラブ
21日	二火会 三水会 山想倶楽部 つくも会
22日	図書管理委員会 山の自然

23日	学研究会 山遊会 アルパインフォトビデオクラブ
26日	新法人移行プロジェクト アルパインスキークラブ 高尾の森づくりの会
27日	インターネット小委員会 千葉支部 ゆきわり会
28日	自然保護委員会 海外委員会 麗山会
29日	山の日制定プロジェクト アルパインスキークラブ みちのり山の会
30日	図書委員会
31日	土曜会

10月来室者650名

会員異動(10月)

物故

松丸秀夫	(3503)	09・10・18
廣瀬吉彦	(4936)	09・10・11
水上 巖	(4945)	09・5・3
井上豊重	(6635)	09・10・1

退会

高橋信成	(5885)
加藤耕一	(8587)
名越礼子	(9175)
内藤玲子	(12811) 京都

終身会員

土橋進一	(6507)
------	--------

I N F
O R M

インフォメーション

A T I
O N

◆スキー懇親会

集会委員会

恒例のスキー懇親会を開催しま
す。

日時 平成22年1月15日(金)～17日

(日)

宿泊 白馬村「雷鳥ヒュッテ」

八方尾根・白樺ゲレンデ前
槍ヶ岳山荘直営

費用 2万3000円(宿泊・保

険・通信費他)リフト代別

定員 40名

申込 12月15日までに、植木淑美

(TEL 042-734-1498

✉ yoshimi-denali@com.home.ne.jp)

*現地集合・現地解散

*申込者に詳細を送ります

◆積雪期の赤岳に登る

集会委員会

赤岳鉱泉泊。翌朝、文三郎道・
赤岳・地蔵尾根を下る。

日程 平成22年3月6日(土)～8日

集合

(月)

解散

費用

定員

申込

3月6日(土)10時、JR茅野
駅前
3月8日(月)茅野駅
3万1000円(2泊3日)
15名
1月20日までに、成瀬ヒサ
(FAX 045-933-6826

✉ h-naruse@kf.biglobe.ne.jp)

*申込者に詳細を送ります

◆「倉岡裕之・世界の高峰スライ

ドショー'09」

セブンサミッツをはじめとして、

世界の高峰登山ガイドのスペシャ

リストとして活躍中の倉岡裕之ガ

イド。今秋のマナスルとカルステ

ンツ最新登山をはじめ、世界の高

峰、セブンサミッツなどをスライ

ドをまじえて報告します。

日時 12月8日(火)18時30～

場所 ウェック・トレック(東京

年次晩餐会は「花の山」をテーマにしました

12月5日(土)、年次晩餐会を開催します。

今回は、会場を変え100周年記念祝賀会で使用した「飛天」です。
恒例の「秩父宮記念山岳賞」受賞および受賞者による基調講演、
海外基金登山隊の登山報告以外に、「花の山」をテーマに、各支
部の魅力的な花の山をパネルで紹介します。また、高山植物の魅
力を山岳写真、スケッチなどもあわせて展示します。ご期待くだ
さい。

詳細は10月に送付しました「晩餐会のご案内状」をご覧ください。

日時 平成21年12月5日(土)

場所 グランドプリンスホテル新高輪「飛天」

総務委員会

都港区西新橋3-24-8山
内ビル4階)

問合・申込(ウェック・トレック

担当・中島 TEL 03-3343

7-8848 FAX 03-3343

7-8849

✉ info@everest.co.jp

http://www.everest.co.jp)
*入場無料、要申込(当日飛入り
OK)

■『山岳』第百四年で訂正

二十年目の海外登山基金、13
0ページと132ページで「明治大学炉端
会」が「明治大学炉辺会」、奥付の
茗溪堂の電話「03-3291-
9442」が「03-3291-
2811」の誤りです。訂正して
お詫びします。(山岳編集委員会)

■お知らせ

8月(771)号8ページ、「ひとり
で挑んだマナスル、幸運の登頂」
は、通称「ニセ・ピーク」と言わ
れるピークへの登頂でした。

(会報編集委員会)

植村直己冒険館

兵庫県豊岡市日高町伊府785

TEL 0796-44-1515 FAX 0796-44-1514

URL: <http://www3.city.toyooka.lg.jp/boukenkan/index.html>

山の博物館訪問

**入館料** 大人500円 65才以上250円

高校生200円 小中学生150円

開館時間 9:00～17:00(入館は16:30まで)**休館日** 水曜日(祝日の場合は翌日)、12/28～翌1/4**交通機関** JR江原駅より全但バス「稲葉」「東河内」行き乗車約10分、「植村直己冒険館前」下車、徒歩3分

——今もなお、世界の人々に愛され賞賛される植村直己の「人と心」を伝える——

少年の心そのままに、好奇心と探究心を胸に努力と卓抜した精神力で次々と前人未到の記録と伝説を植村直己は生み出してきました。

「植村直己冒険館」はそのような数多くの彼の偉業とともにそこに隠された素顔を紹介し後世に伝えてゆくため、平成6年に開館しました。

来館者には、植村直己を「素顔の植村直己～夢果てしなく～」の記録映像で紹介、展示室で北極圏犬ゾリ行・エベレスト遠征・南極の越冬などで愛用した装備品を「進む」「登る」「食べる」など6つのテーマにそって冒険における「知恵と技術」を紹介。ギャラリーでは、世界五大陸最高峰の頂上石をはじめ植村直己が世界放浪の旅で集めた民芸品や家族へ綴った絵葉書などを7つのテーマにそって紹介しています。

また、大地を切り裂くクレパスをイメージしながら、北極圏1万2000⁺。犬ゾリ単独行に代表される「距離への挑戦」を200⁺の長い通路で表現、雪洞(イグルー)をイメージした展示室、こよなく愛した日高の自然と一体化させたランドスケープなど建築空間も植村直己の偉業を顕彰する構成となっています。

勇気あるチャレンジを応援したい、「冒険精神」を発揮した人を心から称賛したい……。豊岡市は、全国のチャレンジャーを応援するとともに、1996(平成8)年、植村直己を称え「植村直己冒険賞」を創設。自然を相手に人間の可能性に挑んだ創造的な行動とともに、多くの人に夢、希望そして勇気を与えた冒険者に、毎年、冒険賞選考委員会が選考し、賞を授与しています。

平成21年度 行事予定 集会委員会

5月22日～27日	熊野古道 奥駈け南半分(前鬼～熊野本宮)	8月	アメリカ・ロッキー山脈4000 ⁺ トレック(詳細検討中)
5月	残雪の岩手山(2泊3日)	9月	北アルプス集中登山(詳細検討中)
6月19日 13時から	土曜懇話会 講師＝森 武昭氏	10月3日～4日	増富温泉と天飾山
6月	若葉山行 栃木の山々(1泊2日)(未定)	10月30日、31日	集会委員会第5回研修会
7月10日～19日	欧州アルプス(詳細検討中)	12月5日	晩餐記念山行(場所未定)
8月6日～8月8日	甲斐駒ヶ岳・千丈ヶ岳	1月21日～23日	スキー懇親会(場所未定)

◆編集後記◆

●晩秋の秩父を何年ぶりかで訪れる機会がありました。駅前から望む武甲山は、かつて緑に覆われていた美しい姿ではありません。さらに山が削られ、低く、小さくなつたように感じられました。その山容さえも変えてしまう人間のおごりを、武甲山に見る思いがします。

●話題になつている八ツ場ダムも、厳しい現実を私たちに突きつけてきます。難しい選択を迫られています。現状を報告してくれました。

●最近、新聞各紙でキリマンジャロの水河が消えるという記事を目にしました。期せずして、宮下啓三さんからアルプスの雪が消えたというお話を伺い、原稿にまとめてもらいました。今月号は、自然保護からむ内容が多くなりました。(神長幹雄)

日本山岳会会報 山 774号

2009年(平成21年)11月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビュー・ハイツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

FAX 東京(03)3261-4441

発行者 日本山岳会会長 尾上 昇

編集人 神長幹雄

Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp

印刷 株式会社 双陽社